

3 : 4 生活

2つの仕事



2023/11/28

岡部明子

東京大学 GSFS

0. 「3：4生活、2つの仕事」への私的**起点**

1. 「二地域居住」は**手段**

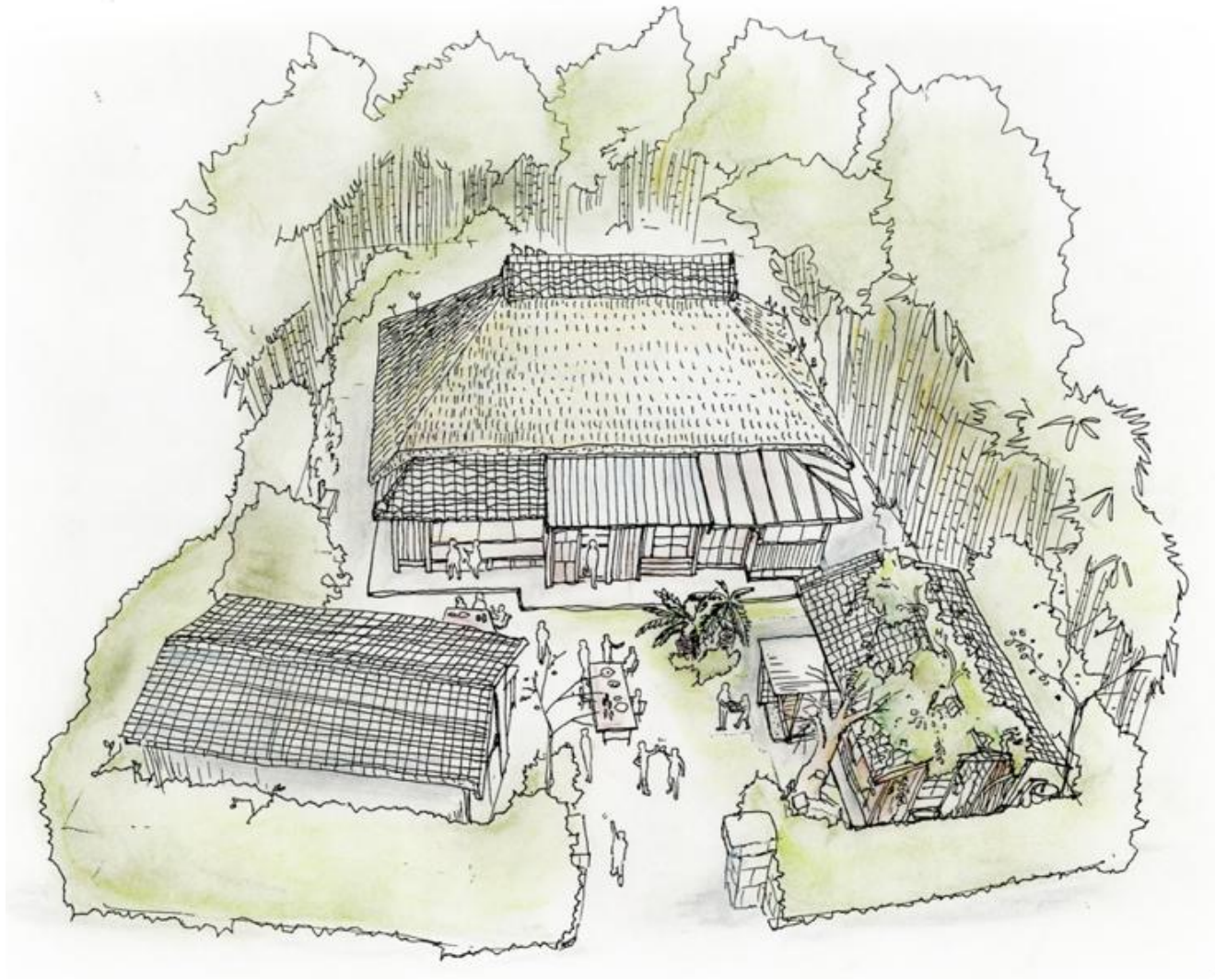
2. 二地域居住する目的は〈外〉への**希求**

3. **誰もが二地域居住している**

0. 「3：4生活、2つの仕事」への私的起点

地中海、夢のデュアルライフ

- ・ 1985年からバルセロナ（スペイン）で暮らすようになって週末のバルセロナは閑散、取り残された気分
豊かな別荘コミュニティの存在
- ・ 週休3日？4日？
「最近、週休3日ではなくなってしまった」とぼやく建築家
- ・ 夢の**3：4生活、2つの仕事**：都市バルセロナと地中海の島
バルセロナのペインクリニックの医師のライフスタイル
週3日バルセロナの診療所、週4日メノルカ島（2日診療）



東京湾をはさんで

3 : 4 生活 ?

2つの仕事 ?

- ・ 大学
- ・ コミュニティの仕事

ゴンジロウ 海辺の里に残る空き古民家
館山プロジェクト十余年の原点 2009年

コミュニティの仕事



浜掃除 (2017)



神社掃除 (2017)

雇用や余暇以上に、ownwork が重要になる cf シャドーワーク (イリイチ)

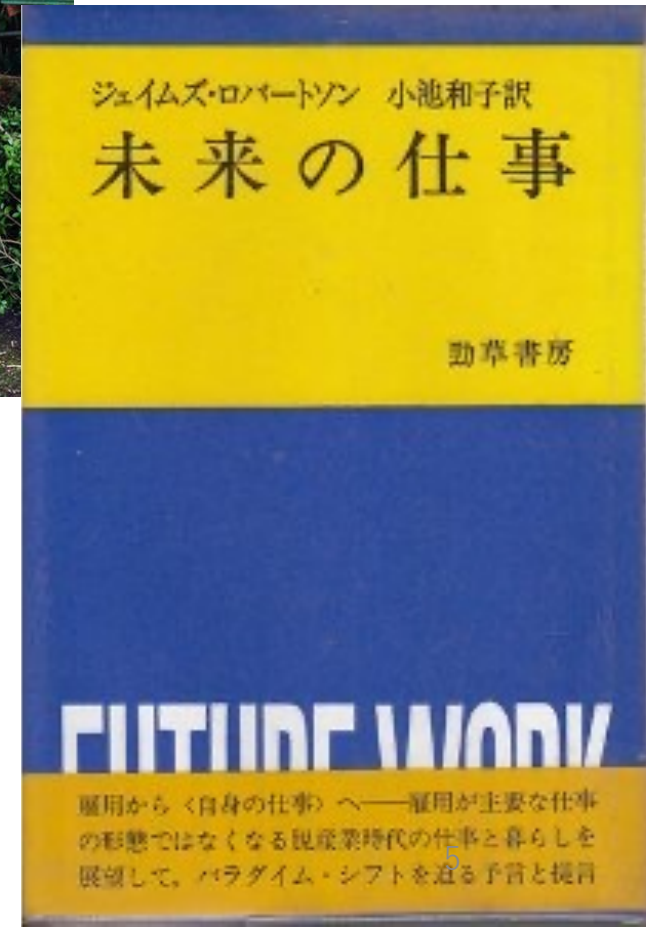
ownwork 自分仕事：

自分や地域にとって意味のある活動を、自身の裁量で仕事として行なうこと
インフォーマルセクターで仕事する

(余暇活動にもお金のかかるものからお金を稼げるものまである)

ますますownworkと余暇の区別は曖昧になっていく

J. ロバートソン (1985)



ジェームズ・ロバートソン 小池和子訳
未来の仕事

勁草書房

FUTURE WORK

雇用から「自身の仕事」へ——雇用が主要な仕事の形態ではなくなる脱産業時代の仕事と暮らしを展望して、パラダイム・シフトを迫る予言と提言

コミュニティの仕事の後は、お祭り…

2017

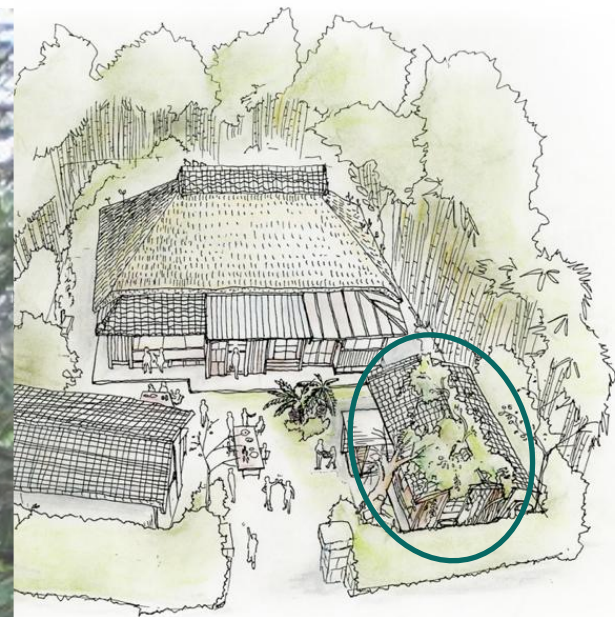


2012









2013
廃屋キッチン

2018
PACRIM賞受賞



コロナ禍の「自分仕事 ownwork」

2020
布良崎神社
神輿蔵



2020
安房塩見
バス停



0. 「3：4生活、2つの仕事」への私的**起点**

1. 「二地域居住」は**手段**

2. 二地域居住する目的は〈外〉への**希求**

3. **誰もが二地域居住している**

1. 「二地域居住」は手段

現行の二地域居住政策を遡ると:

二拠点生活、デュアルライフ、マルチハビテーション、半定住、交流居住、複居、兼居、テレワーク、逆参勤交代、**関係人口**、転職なき移住、近居

1980年代 過疎対策としてマルチハビテーション

2002年、半定住 森巖夫

2004年、**二地域居住**

2008年 ふるさと納税

2009年 地域おこし協力隊

2013年度 国土のグランドデザイン2050 ～対流促進型国土の形成～

2014年 地方創生

2018年度 総務省は、関係人口創出モデル事業

国土形成計画 国土審議会計画推進部会 住み続けられる国土専門委員会

2020年 コロナ禍でテレワーク

2021年 全国二地域居住等促進協議会 →二地域居住を増やすことが使命

1. 「二地域居住」は手段

目的としての「二地域居住」、手段としての「二地域居住」

目的としての「二地域居住」

課題：どうすれば二地域居住を増やせるか

- ・時間とお金のゆとり
- ・こどもの教育

手段としての「二地域居住」

課題：

何が目的なのか、二地域居住を手段として何が実現したいのか

受入れ地域の自治体： 地域活性化、不足する地域づくりの担い手に

二地域居住する人たち： 買い物・食・自然・スポーツ・趣味...

能動的に：目的あり

偶発的に：地域との関わりがきっかけ？

しかたなく：単身赴任、大学進学、親の介護、実家の管理、出稼ぎ

受け入れ地域の自治体は何を実現したいのか（目的）
人びとは何を求めているのか（目的）

= メリット？

↓

目的達成にどのような手段があるのか

↓

手段のひとつとしての
二地域居住

目的としての「二地域居住」

課題：二地域居住をどうすれば増やせるか

- ・時間とお金のゆとり
- ・こどもの教育

手段としての「二地域居住」

課題：

何か目的なのか、二地域居住を手段として何が実現したいのか

受入れ地域の自治体： 地域活性化、不足する地域づくりの担い手に

二地域居住する人たち：買い物・食・自然・スポーツ・趣味...

【参考】国土交通省 ライフスタイルの多様化等に関する懇談会
～地域の活動力への活かし方～ 2019～2020年

https://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudoseisaku_tk3_000099.html

→ 関係人口の定量的把握

1-1 三大都市圏の関係人口の実態把握

- 人口減少・少子高齢化が進む状況において、地域の社会的・経済的活力を維持していくためには、地域と関係人口が協働しつつ、地域の活動力を高めていくことが有効である（関係人口が大きな役割を果たす可能性）。
- 関係人口の拡大・深化を図るためには、現状を踏まえた上で具体的な施策の方向性（気づきを与え、自発的な取組を促す施策）を示す必要があるが、関係人口はその実態が十分把握されていない。
- よって、令和元年度はインターネットアンケートにより、試行的に三大都市圏の関係人口の実態把握を実施。

対象者：18歳以上の三大都市圏に居住する人（WEBリサーチモニター）

一次調査：30,000サンプル

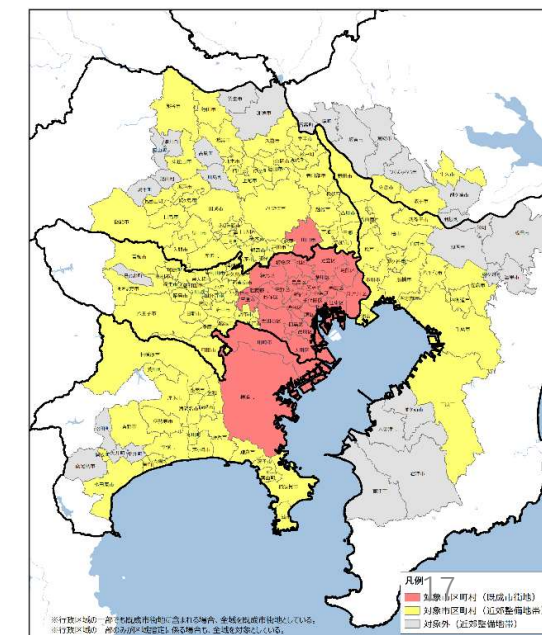
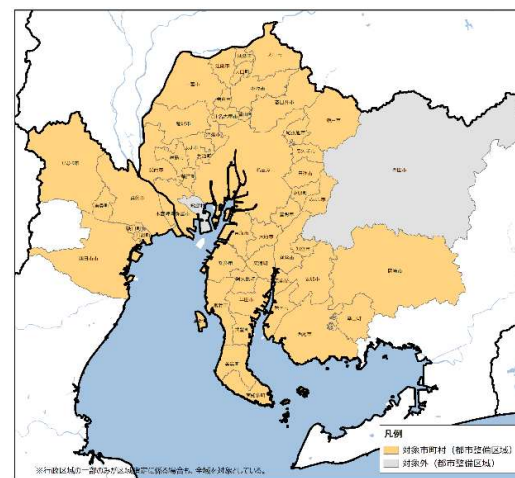
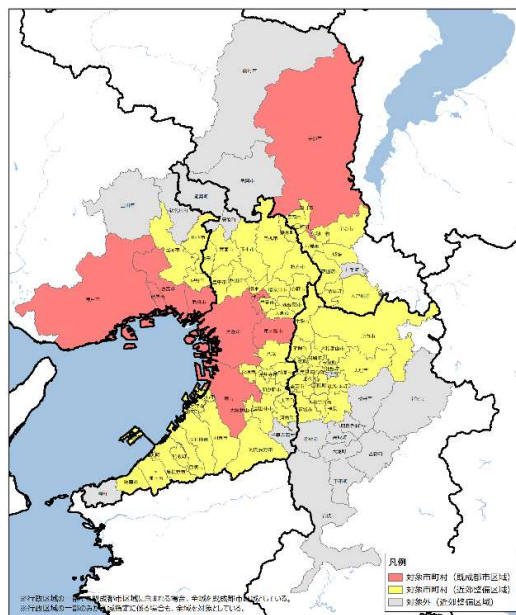
二次調査への移行は、訪問タイプ：最大10,000サンプル、非訪問タイプ：最大5,000サンプルを想定

※ 地域区分ごとに、性別・年代別の人口比等に応じて配布数を設定

▶ 令和元年9月実施、有効回答数28,466人（18歳から99歳の男女が回答 男性：14,153人 女性：14,313人）

【調査対象地域】 下図の着色した地域（灰色部分を除く）

首都圏の既成市街地または近郊整備地帯、中部圏の都市整備区域、近畿圏の既成都市区域または近郊整備区域に含まれる市区町村（人口密度が当該大都市圏平均よりも低い、かつ、1次産業就業者割合が当該大都市圏平均よりも高い市町村を除く）



1-5 三大都市圏における関係人口の推計値

直接寄与型

就労型

参加・交流型

趣味・消費型

- 三大都市圏の18歳以上の居住者（約4,678万人）のうち、約2割強（約1,080万人）が関係人口として、日常生活圏、通勤圏等以外の特定の地域を訪問している。

三大都市圏居住者の日常生活圏、通勤圏以外の地域との関わりの状況

推計の概要

- 三大都市圏に居住する約3万人に対してインターネットアンケートを実施（18歳から99歳の男女、28,466人が有効回答）
- 調査対象地域の18歳以上の人口（約4,678万人）に基づき、男女比率及び年齢構成を踏まえて拡大推計を実施

用語の定義

【関係人口(訪問系)】

日常生活圏、通勤圏、業務上の支社・営業所訪問等以外に定期的・継続的に関わりがある地域があり、かつ、訪問している人（地縁・血縁先の訪問（帰省を含む）を主な目的としている人を除く）

〈大分類〉…地域における過ごし方に応じて分類

【直接寄与型】

産業の創出、地域づくりプロジェクトの企画・運営、協力、地域づくり・ボランティア活動への参加等

【就労型】

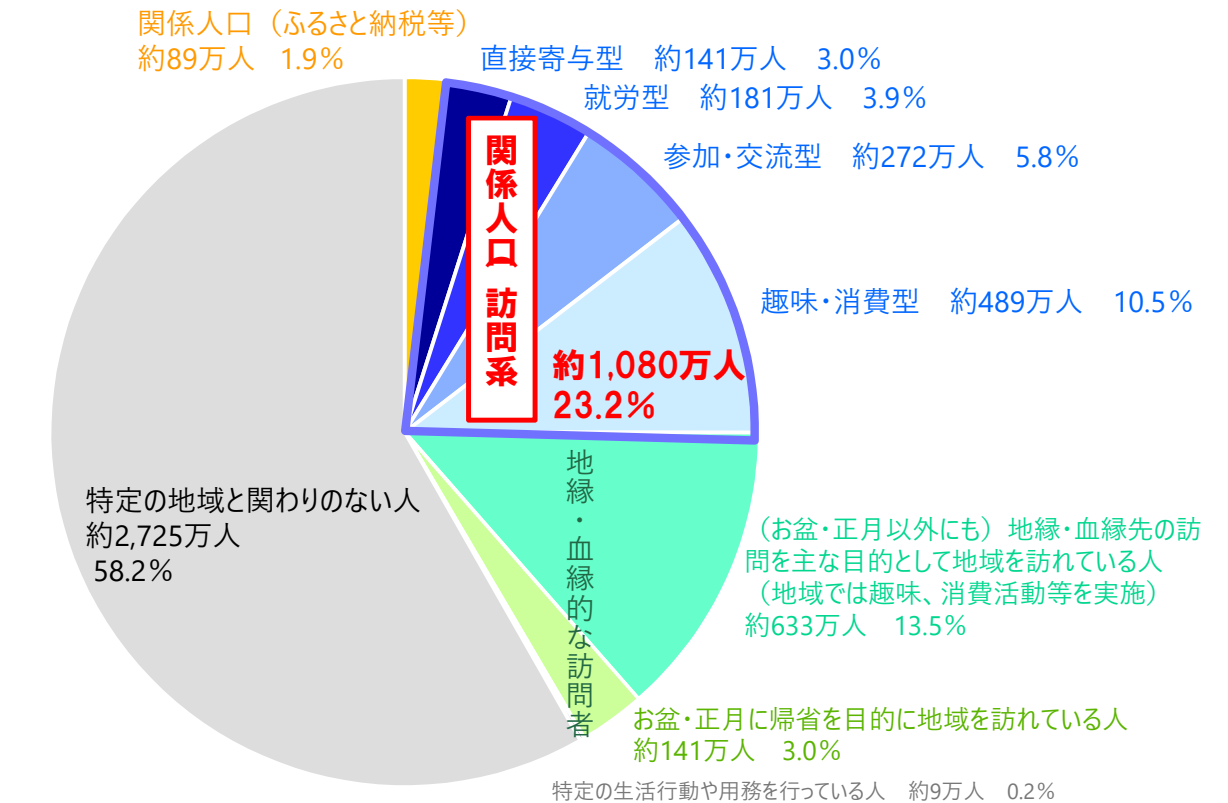
地域においてテレワーク及び副業の実施、地元企業等における労働、農林水産業への従事

【参加・交流型】

地域の人との交流やイベント、体験プログラム等に参加

【趣味・消費型】

地縁・血縁先以外で、地域での飲食や趣味活動等を実施（他の活動をしていない）



(出典)「地域との関わりについてのアンケート」(国土交通省、令和元年9月実施) (三大都市圏の関係人口、人数ベース)

目的としての 「二地域居住」

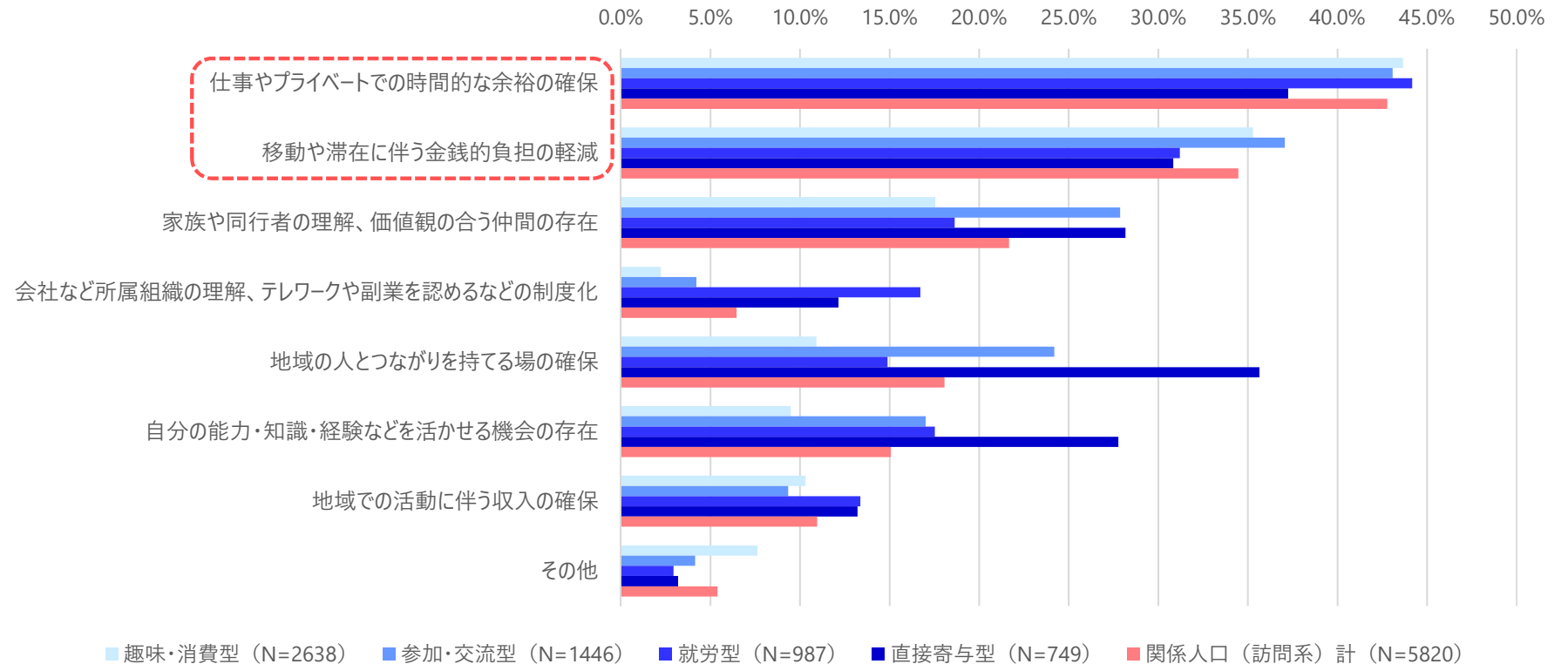
どうすれば
関係人口を
増やせるか

時間とお金

IV-2 地域との関係性を深められる要素

- 関係人口（訪問系）が考える“地域との関係性を深められる要素”には、“仕事やプライベートでの時間的な余裕の確保”及び“移動や滞在に伴う金銭的負担の軽減”があげられており、ライフスタイルの変化やシェアリングの拡大が関係人口の拡大・深化にプラスに作用することが想定される。
- 一方で、テレワーク及び副業の制度化に関する希望は比較的小さい。

関係人口(訪問系)における地域との関係性を深められる要素

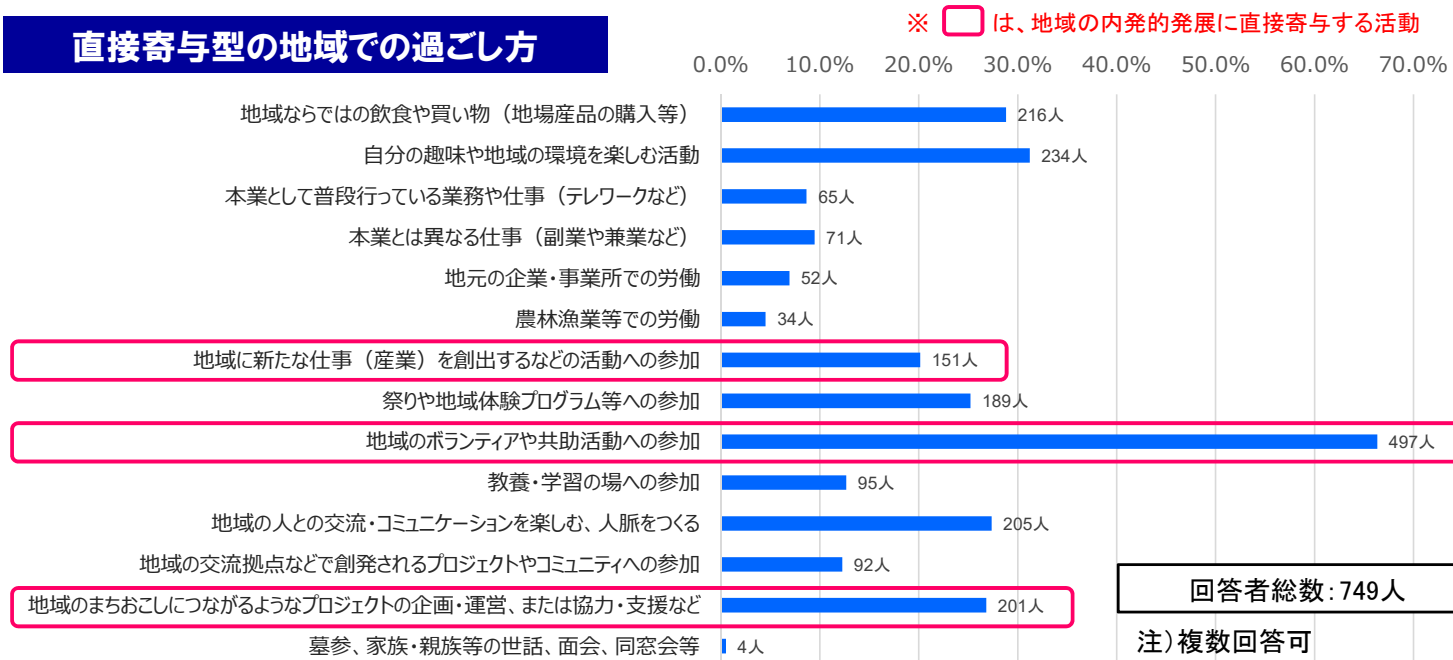


(出典)「地域との関わりについてのアンケート」(国土交通省、令和元年9月実施) (三大都市圏の関係人口、人数ベース)

5. 直接寄与型は関わり先でどう過ごしているのか

- 直接寄与型における地域の内発的発展に直接寄与する活動は、“地域のボランティアや共助活動への参加”がメインとなっている。
- さらに、“地域のまちおこしにつながるようなプロジェクトの企画・運営、または協力・支援など”への参加も比較的高い割合で確認できる。
- 直接寄与型の方は、地域の人との交流やコミュニケーション、人脈づくりを意識している。

直接寄与型の地域での過ごし方



（出典）「地域との関わりについてのアンケート」（国土交通省、令和元年9月実施）（三大都市圏の関係人口、人数ベース）

手段としての「二地域居住」

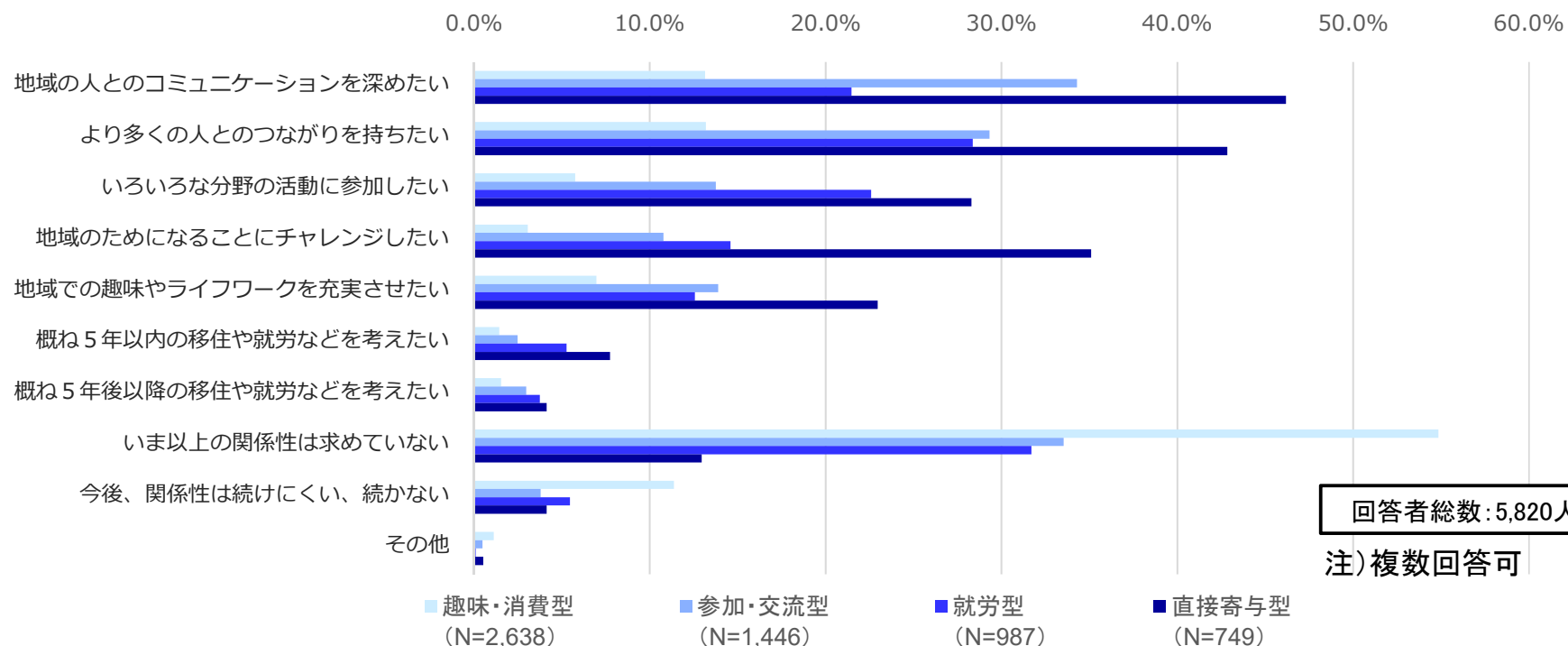
受入れ地域の自治体にとっては、不足する地域づくりの担い手を確保する手段

「**直接寄与型**」が、地域づくりの担い手としてのポテンシャル高

10. 関係人口(訪問系)が求める地域との多様な関わり

- 関係人口(訪問系)のうち、直接寄与型は、地域の人とのコミュニケーションを深めたり、多くの人とのつながりを持つことや地域のためになることにチャレンジしたいなど、関わりの深化を求める傾向が強い。
- 一方で、趣味・消費型は“いま以上の関係性は求めている”人が5割を超えるなど、関わりの深化をあまり求めている。
- また、参加・交流型では、地域との関わりを深めたいという傾向が若干強まることから、地域との関わりを深めるきっかけを創出することが重要と思料される。

関係人口(訪問系) 大分類ごとの関わり



「参加・交流型」を「直接関与型」に導くには：

きっかけ創出

0. 「3：4生活、2つの仕事」への私的**起点**

1. 「二地域居住」は**手段**

2. 二地域居住する目的は〈外〉への**希求**

3. **誰もが二地域居住している**

2. 「二地域居住」の目的は〈外〉への希求

目的としての「二地域居住」、手段としての「二地域居住」

目的としての「二地域居住」

課題：どうすれば二地域居住を増やせるか

- ・時間とお金のゆとり
- ・こどもの教育

手段としての「二地域居住」

課題：

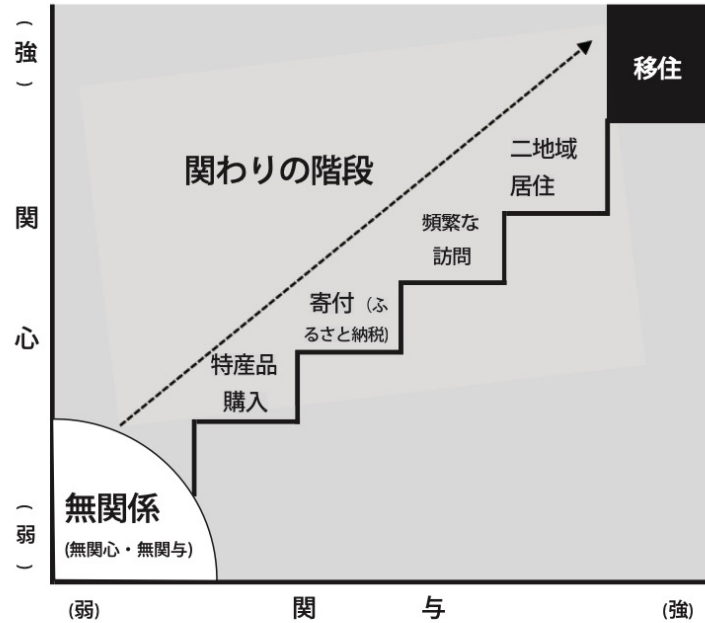
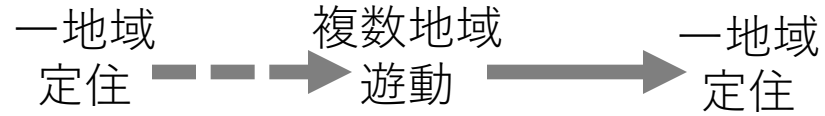
何か**目的**なのか、二地域居住を手段として**何が実現したい**のか

受入れ地域の自治体： 地域活性化、不足する地域づくりの担い手に

二地域居住する人たち： 買い物・食・自然・スポーツ・趣味...

〈外〉への**願望** ？

実践からみえてきた気づき



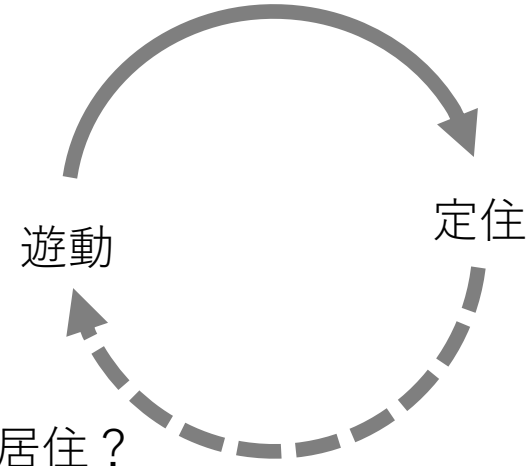
関係人口の図式化 (小田切)

定住を前提として：

ゴールは地方移住？

移住先に求められるのが：

仕事の選択肢、都市並みの利便性



「旅するように暮らす」(TURNS)
アドレスホッパー

一般的には：農耕するようになって定住した
人民を管理するのに定住が都合がよかった

人類学的にみると：

遊動生活が立ち行かなくなって定住した

(西田正規)

定住がストレスや退屈を生んだ

(國分功一郎)

二地域居住 (脱定住生活) は人新世へのソリューション

(山極壽一)

〈外〉への願望

〈外〉：なんらかのものの外にあるが、
内と外の二元論を前提としないところの領域

高度化した精緻なシステムに依存しきって生活することの**不安**
何か生活上の問題がおきたら、専門家に頼むしかない。
自分で、自分たちでは、どうしようもない…
現在私たちが依存しているシステムは、定住（一地域居住）が前提

いざというときのために、お金を用意して不安を紛らす。
せいぜい、業者や行政にクレームをいうしかない。

〈外〉への願望

こうした状況から、その外に、逃れたい…

直面した問題に対して、

自分で、自分たちで、考えて工夫し、行動できる環境への羨望

生まれて死ぬまで逃れられようのない社会に、内と外はないけれど、
今置かれている環境から逃れた〈外〉への願望

〈外〉の生活 = 定住生活のストレスと退屈から逃れた遊動生活 利便性

〈外〉の仕事 = 大きなシステムに依存しない人間本来の仕事 賃労働

イリイチ | (1973=1989) 『コンヴィヴィアリティのための道具』

松村圭一郎 (2021) 『くらしのアナキズム』

二地域居住を手段として、〈外〉に身を置きたい…

切実な〈逃げ場〉としての田舎

グローバルな都市間競争が激化するにつれて効率化が求められ、おおらかさを失って、大都会の歯車にはアソビがなくなる一方だ。人間が暮らすには耐えがたいほど窮屈になってしまった東京は、失ったアソビを〈田舎〉に求めている。東京ライフに息苦しさを感じ、東京からさまよい出た人たちの〈逃げ場〉である。〈都会〉が必要としているのは、目先の競争や経済効率性やリスク管理に怯える生活から一瞬でも解放される〈田舎〉である。

ユングの湖畔の塔

1922年 ユング47歳のときに着手し、35年かけて自力で石工の資格を取り、ギルドに入って

「言葉や論文では本当に十分ではないと思われ、なにかもっと他のものを必要とした。・・・私の得た知識を、石に何らかの表現をしなければならない」（C.G. ユング『ユング自伝2』1961-3年）。そして、ボーリングゲンでユングは、「ここでは創造の苦しみは影をひそめて、創造と遊びとが一体となっていた。」本来的な生をいき、幾世紀かの過去をさかのぼった考えが浮かんでくれば、それがまた遠い将来を先取りしていた。ユングは、近代化された便利な生活だけでは、人が生きるのにどうしても足りないものがあると感じていた。それが、汗して、石を割り、石をひとつひとつ積むことで、長い時間軸の中に生きている自分を確認する場所としてのボーリングゲンの塔だった。私にとって、ゴンジロウは、さながら「ユングの湖畔の塔」

岡部明子（2017）「新日本再生紀行8 千葉県館山市（その二）都会が古民家を必要としている」『建築とまちづくり』464号 42-43頁

ゴンジロウを〈外〉の学びの場に、遊びの場？

茅葺は、手に入る材料で、自分たちの力で、雨風を防ぐ環境をつくれることの追体験



〈外〉への希求、願望… 失われていく自由を求めて

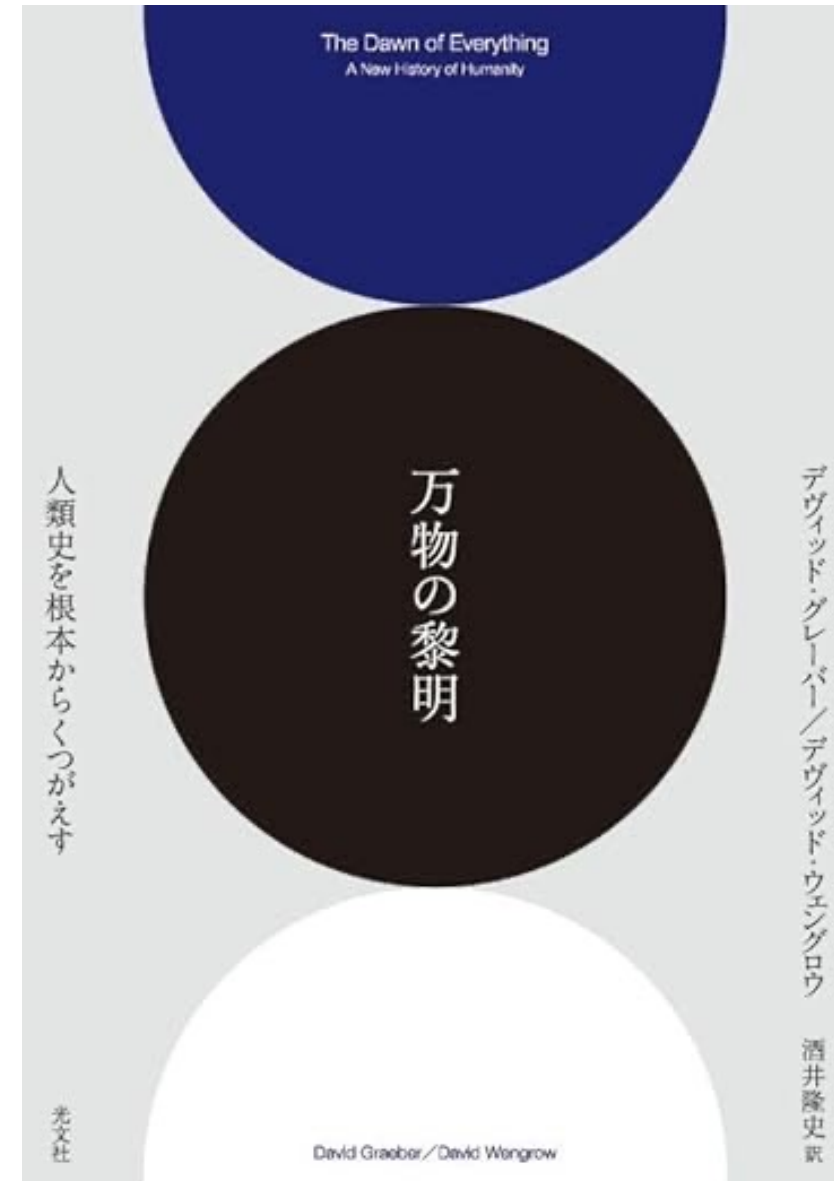
自由が後退している：

- 1) じぶんの環境から離れたり、移動したりする自由
- 2) 他人の命令を無視したり、従わなかったりする自由
- 3) まったくあたらしい社会的現実を形成したり、異なる社会的現実のあいだを往来したりする自由

(グレーバー；ウェングロウ 2021=2023)

都市と遜色のない雇用機会や利便性、文化、インフラ以上に

〈外〉への願望を受け止められる地域が
求められている



3 : 4 生活

2つの仕事

岡部明子（2018）「2つの仕事で4 : 3生活 週休2日制の次のライフスタイル」大野秀敏ほか（2018）『コミュニティによる地区経営：コンパクトシティを超えて』鹿島出版会164-168頁

0. 「3：4生活、2つの仕事」への私的**起点**

1. 「二地域居住」は**手段**

2. 二地域居住する目的は〈外〉への**希求**

3. **誰もが二地域居住している**

「社会システムから複数箇所（二地域）居住を考える」（岡部, 2005）

スペインの場合を中心に（2005年時点）

住宅総数：ここ20年で +40%
核家族化 + 別荘の大衆化 + 国外からの別荘需要

住宅総数に占める別宅の比率：
欧州平均10% スペイン30%超(欧州で最も高い)
別荘を持つ南欧の伝統
アルプス以北からの別荘需要
本宅以上に投機的対象

二地域居住の多様な**形態**：グローバル化・欧州化を背景に
年周期、週周期、（毎日）

2つの本宅、本宅と別宅

↓ **二世帯で二地域居住**

自分の別荘、**親の本宅／子の本宅、親の別荘、農村部にある実家**

農山漁村の古民家・小都市の町家活用、新築別荘、田舎の分譲戸建別荘、
海沿いの週末マンション

社会にとってのメリット、デメリット

メリット

平日居住する都市と週末居住する田舎の役割分担

補完関係、都市的なにぎわいだけでは住居として不完全

デメリット

二地域居住者（週周期）と一地域居住者の格差

都市では多様性を尊重した包摂が価値である一方、

週末を過ごす地域では、社会階級に閉じた親密なコミュニティ…

地中海、夢のデュアルライフ

- ・ 週休3日？4日？

バルセロナのペインクリニックの医師のライフスタイル

週3日バルセロナ、週4日メノルカ島 **3：4生活 2つの仕事**

- ・ コンパクトでにぎわいのある都市バルセロナは**不完全**

補完するのが週末住居なんだ…

古代ギリシア・ローマ市民は、都市の外に館があって都市と二地域居住

都市の住居も、外の館も不完全 両方合わせて住居というライフスタイル



ゴンジロウでお待ちしています

